

近藤忠義 年譜

雑誌名	日本文学誌要
巻	23
ページ	95-96
発行年	1980-02-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019271

近藤忠義先生略年譜

一九〇一（明治三四）年 一月一日、神戸市花隈町にて、父近藤房太郎忠憲・母きくとの間に生る。五歳の時、父、海難救助作業で殉職、以後、ひとり子として育てられる。

一九二四（大正一三）年 二三歳、第六高等学校（文科甲類）より東京帝国大学文学部国文科に入学。近世文学専攻。

一九二七（昭和二年） 二六歳、三月、同大学卒業。卒業論文『歌舞伎劇序説』（同年九月より翌年七月にかけて、雑誌「歌舞伎研究」に発表されるも同誌廃刊と共に中絶）。四月、東京府立第六中学校（現新宿高等学校）講師となる。

一九二九（昭和四年） 二八歳、智山専門学校教授となる。翌年、東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）、東京女子大学講師を兼任し、近世文学を講ず。この頃、『日本文学大辞典』（昭和七年より一〇年刊行、新潮社）の浄瑠璃・歌舞伎の項を執筆。

一九三一（昭和六年） 三〇歳、藤村宮子と結婚（四月三日）。長野女子専門学校に出張講義（三二年度迄）。

一九三二（昭和七年） 三一歳、長男創誕生（三月三十一日）。五月、東京音楽学校の「思想事件」に坐して講師解任さる。東京女子大学においても同校講義草案をもとにした「近松の芸術」（岩波講座「日本文学」）刊行により一ヶ年の「懲戒休講」を受ける。

一九三三（昭和八年） 三二歳、法政大学、日本体育会体操学校（日本体育大学）講師となる。日本俳優学校に出講。一月、法政大学国文学会機関誌「国文学誌要」創刊、「歴史社会学派」と呼ばれる新しい学風の拠点となる（昭和二年一月迄一二号刊行）。翌年度、法政大学教授となる。

一九三五（昭和一〇）年 三四歳、『曾根崎心中・用明天皇職人鑑』（岩波文庫）校訂・解説）刊。

一九三六（昭和一一）年 三五歳、岡崎義恵の「日本文芸学の樹立」をきっかけに、鑑賞、芸術の価値・評価、文芸史等の諸問題を取り上げ活潑な論争の口火を切る（論争は戸坂潤らの唯物論研究会をもまき込み昭和一三年頃まで継続）。六月、「国文学解釈と鑑賞」創刊号に寄せた「注目すべき作品論——永積安明氏の『方丈記序論』——」が右翼雑誌「原理日本」七月号で三井甲之に告発される。

一九三七（昭和一二）年 三六歳、二月、これ迄諸雑誌に発表された論考を基に『日本文学原論』を編するも時代風潮の故、岳父藤村作著として同文書院より刊行。（戦後、昭和二年、藤村作・近藤忠義共著の形で河出書房より再版、以後、著者自身の名で二版がある）。次男健誕生（四月一日）。尾佐竹猛、岡邦雄、三枝博音、杉山平助編集の『日本講座』（三笠書房）第八巻「文芸」の編集者となるも中傷を受け、本講座も中絶。六月、国文学界の孤立化した現状を克服せんとして雑誌「文芸復興」創刊（五号にて休刊を余儀なくされる）。

一九三八（昭和一三）年 三七歳、軍部による文学部廃止の策謀に抗して、学内外の進歩的文化人を結合し公開「文化講座」を開催、その編成と運営に当る、協力者ほぼ四〇名。一〇月、『近世小説』（河出書房『日本文学大系』第二〇巻）刊。

一九三九（昭和一四）年 三八歳、ファッショ的歪曲に対し、古典の正しい理解と普及を意図した『日本古典読本』（日本評論社）を企画し、その編輯責任者となる。五月、『西鶴』（日本古典読本第九巻）刊。翌年八月、『日本文学入門』（日本評論社）編（同書共に「悪書」として「糾弾」される、昭和一八年「公論」一一月等）。

一九四一（昭和一六）年 四〇歳、武蔵高等学校（現武蔵大学）並にNHK放送劇団に出講。七月、法政大学文政学科文芸学部機関誌

「文濠」創刊、編輯・発行人となる。

一九四三（昭和一八）年 四二歳、母きく死去（六月二四日）。一二

『日本の女性文化』（堀書店）編。

一九四四（昭和一九）年 四三歳、三月一日、治安維持法により検
挙され、玉川警察に拘置される。

一九四五（昭和二〇）年 四四歳、中野の東京拘置所（豊多摩刑務所）
に移される。八月一七日、終戦二日後の夜、帰宅を強要される。

一九四六（昭和二一）年 四五歳、六月一五日、日本文学協会創立、
理事となる。創立総会公開講演「文学と政治」。

一九四八（昭和二三）年 四七歳、二月、日本学術会議会員とな
る、以後、昭和二八年まで第一期第二期会員を務む。七月、石

山徹郎追悼『文芸学の諸問題』編。九月、戦中・戦後の時評論
文を中心に『日本文学の進路』（伊藤書店）刊行。十二月、単行本

未収録の論考を『近世文学論』（日本評論社）として刊行。

一九五〇（昭和二五）年 四九歳、五月、日本文学協会中央委員長。
二月、レッド・パージ反対学生運動にさいし、声明書発表。

一九五一（昭和二六）年 五〇歳、伝統論、国民文学論、国民演劇
論等が活発になり、猪野謙二との往復書簡「歌舞伎をみて（「文

学」二月）」をきっかけに、桑原武夫などと歌舞伎論争がおこる。

一九五二（昭和二七）年 五一歳、十一月、日本文学協会機関誌「日
本文学」創刊、発行人となる。同月、近松生誕三百年記念講演

会開催と共に「近松研究会」を結成。四月より一〇月、『現代
文学総説ⅠⅡⅢ』（学燈社）西尾実と共編。

一九五三（昭和二八）年 五二歳、岳父藤村作死去（二月一日）。
一九五四（昭和二九）年 五三歳、『日本文学史辞典』（日本評論社）に

近世文学の項執筆、十一月一〇日、同書刊行記念講演。

一九五五（昭和三〇）年 五四歳、四月、アジア諸国民会議（ニュー

デリー）に日本代表として出席、ついで中華人民共和国に招か
る。

一九五七（昭和三二）年 五六歳、二月より翌年一月迄、『白蛇伝』
と『蛇性の姪』を「日本文学」に連載。十二月、「日本文学誌
要」（国文学誌要）改題 復刊、編集責任者となる。

一九五九（昭和三四）年 五八歳、ソビエットの招聘により四月よ
りモスクワ大学で日本文学を講じ、引続き、レニングラード大
学、チェコスロバキヤ、カール大学にて講ず。

一九六一（昭和三六）年 六〇歳、過労により東芝林間病院に入院、
翌年四月まで同院にて療養。日本文学協会委員長を辞任。一二
月、「日本文学誌要」第七号「近藤忠義教授還暦記念号」編ま
る。

一九六二（昭和三七）年 六一歳、西尾実・小田切秀雄編、還暦記
念論文集『日本文学古典・新論』（河出書房新社）編まる。

一九六四（昭和三九）年 六三歳、『近松』（三省堂『国語国文学研究史大成』
巻二）守随憲治・乙葉弘と共編。

一九六六（昭和四一）年 六五歳、和光大学創立、人文学部文学科
長となる。翌年、法政大学を辞職、名誉教授となる。

一九七六（昭和五二）年 一月三十一日、和光大学退任記念講演。二
月二五日、盲腸炎により東芝林間病院に入院、四月三〇日、午
後零時五分永眠、急性多発性・胃十二指腸潰瘍（七四歳五ヶ月）。
一〇月『日本の近代と文学』（和光選書）刊行される。

一九七七（昭和五三）年 一月、戦後の単行本未収録の諸論考が『日
本古典の内と外』（金剛書院）として刊行される。四月より八月、
選集『近藤忠義日本文学論』（全三巻、新日本出版社）刊行。